

「先人に学び、 立地とやる気を生かしたまちづくり」

両総用水事業推進協議会 副会長
白子町長 林 和 雄



テニスコート

白子町の代名詞は「テニスのまち」。スポーツリゾートとして知られ、340面のテニスコートがひとつの地域に集約されているのは日本一と言われています。

温暖な気候を生かし、四季を通して各種大会や合宿が行われ、全国高校総合体育大会や国民体育大会ではソフトテニスの会場地となり、全国のプレーヤーや応援者に高い評価を得ました。近年は、サッカーグラウンドやグラウンドゴルフコート、室内競技用の体育館も多く建設され、スポーツの多様化、高齢化に対応すべく、工夫と努力を重ねています。

農業も施設園芸を中心に先進的な営農が展開されています。中でもトマトは県下第2位の生産量を誇り、意欲的な若者が養液栽培に取り組み、熱心な研究と努力で難しい技術を習得し、省力化と規模拡大に道を開いています。

白子の養液栽培の先駆役を担ったのは、細ネギ栽培でした。雇用の労力を使い、休日が取れる安定した農業経営を目指し、昭和55年に7人の有志が挑戦しました。当時は、まだ理想の論として周囲からは疑問視、不安視されましたが、見事に目標に到達し、白子農業に大きな刺激を与えてくれました。

その後、農業生産法人が、サラダ菜、ガーベラ、トマトなどの養液栽培の大型温室、団地を次々建設し、白子農業の代表的な存在になっています。また、個人経営のトマト栽培にも導入され、合わせて27戸、17.8ヘクタールで養液栽培が行われています。

もう一方で、「白子たまねぎ」も人気が高まっています。特産のたまねぎを活用し、町の活性化につなげようと始まった「白子たまねぎ祭り」。たまねぎに適した土壌と気候で生産された「白子たまねぎ」は、甘くてみずみずしいと評価も年々上がりました。さらに、全国的にも珍しい「たまねぎ狩り」も始まり、白子の5月の名物行事として定着。栽培面積も広がりはじめ、遊休農地の解消や高齢者の活躍の場としても大きく貢献しています。

白子農業は、先進的な経営と楽しい農業を組み合わせる多様な展開をしていますが、この礎となったのは、両総用水と土地改良であったことは言うまでもありません。十枝雄三、坂本斉一両氏をはじめとした先人たちの血のにじむ努力がありました。しかし、用水が流れてきて当たり前、土地改良という言葉さえ知らない世代が増えている昨今、先人たちの大きな足跡を後世に確実に語り継いでいくことは私たちの責務です。

今、政府は攻めの農業を柱に、農地の集積、国際競争力の強化、輸出拡大等を声高に唱えています。

それも良しですが、全国画一的ではなく、地域の特性を生かし、1人ひとりの個性に適した丁寧な農業振興策こそ、農業農村に活気を取り戻す施策であると確信し、より強力に推進していきたいと思っています。



養液栽培の大型ガラス温室